

【子どもの観察例:ダン&ジェームズ】(男児 1972年9月13日生;3歳1ヶ月 &  
1972年8月21日生;3歳から18ヶ月間の記録)

・1975/09/25・・ダンとジェームズが、どちらが先だったのか知らないが、積み木で片方の先が円くカーブになっているのを幾つか床の上に並べて組み合わせ、‘トンネル’のようなものを作った。さらに、それぞれが小さめの積み木を手にして、それをトンネルの中へと突っ込んだ。その途中で双方の積み木は行き詰まった。それで2人ともなぜかウスクス笑いをした。彼らは全然言葉を交わせることはなかった。しかし何らかの空想 phantasy を共有しているのは間違いなかった。それから直に、2人は躁的な興奮に突入し、トンネルをメチャメチャに壊し、積み木を辺りに撒き散らした。

[彼らがいかにシンボル symbol の意味するところを了解し合っているかは驚異だ。シンボルこそが彼らの共通言語なのだ。この場合、トンネルとは「母胎」につながる道である。ヴァギナでもあろう。そこに「積み木＝父親ペニス」が挿入されるのである。勿論自分のペニスもそこに重なるわけだ。かくして両親の性交の場としての「トンネル＝母胎 Mummy's inside」に彼らの攻撃欲が投射され、やがてそこは血塗られた‘ペニス・バトル’の戦場と化す。そしてこの「自慰空想(masturbatory phantasy)」は、彼らの躁的防衛によって何もなかったこととしてチャラにされる。つまり、証拠隠滅である！]

ダンが「スライド・ハウス」の天辺に立っていた。私がたまたまその傍らを通り過ぎたとき、ふいに彼がごく真面目な顔つきで私に訊く、<ねえ、ぼくのオシッコ欲しい Do you want my wee-wee? >と。私はちょっと意味を測りかねて驚く。事実彼の下半身(bottom)はちょうど私の口の辺りに近い。だが、彼の言ったことが文字通りの意味に解しているものやら迷い、もしかしたら、彼は今日がグループに参加した初めての日だから、トイレに行きたいけどどこか分からないのかと考え直し、彼に訊いてみた。彼は、<うん、ぼくトイレ知ってるよ。あっち、廊下の先(bottom)だろう>と答えた。そちらの方向を指で指しながら・・とても自信ありげで悪びれない。それから、彼は話題を変えた。私にどこに住んでいるのかと尋ねた。そして、彼の家はどっちで、どの道を通ってゆけばいいのかと私に説明した。

ダンが砂箱で、おもちゃのダンプカーの荷台に砂をいっぱい積んでいた。<空っぽだから・・ぼくがもう一度いっぱいにするの・・>と呟いている。彼はそれを繰り返した。それからさらに、小さい方のダンプカーの荷台から大きいダンプカーの荷台へと砂を積み替えるという遊びをした。それから砂をぐるぐると渦まきように掻きまわす。<掘って、掘って、どんどん汚い泥の中へ digging, digging, into the dirty mud・・>と歌っている。その後、彼はもっとたくさんの車を手にして、これらは全部自分のものだからねと主張した。どうも小児万能感 omnipotence の嫌いがある。が、なにやらヤバイ感じでもある。

[実に断固として「母胎 Mummy's inside」へと潜り込み、制圧せんとしている。それを成功裏に収めるためには、小さなペニスは大きなペニスと入れ替えられねばならない。つまり「父親・ペニス」の奪取だろう。かくもペニスへの思い入れが強い。だが、問題は入り口である。肛門とヴァギナが混同されてる。

従って「母胎」は糞尿まみれの「肛門性交」が繰り広げられる場となる。実にヤバい！だが、彼は平然と何食わぬ顔を装う。ここにhypocrite(偽善者)の芽があるといえよう。対象を制御したとしても責任は持てないというわけである。]

1975/10/02・・・ダンが「折り靴」を手につらさげていた。<これ、ぼくジェームズにあげるんだ。ぼく、彼のが好きだから・・・>と私に言う。[事実、「折り靴」は男性用。だが、ここに‘求愛’があるとしたら、随分と同性愛 homosexual っぽい。この場合、‘折り靴’は「ペニス」の象徴であろう。]

ダンが、机で大きなドウ(練り粉)を棒のかたちに練っていた。それからそれを小さく切った。そして丸いケーキ状に平らにして、クッキング皿に並べた。ほんとは「誕生日のケーキ」を作りたかったのだけど、ドウ(練り粉)が足りないとのことだった。突然、彼は私に<ぼくオシッコ、したい・・・>と言う。そこで私が<手を洗うまでちょっと待っていてね、手伝ってあげるから・・・>と言って、彼を待たせる。それから戻ってくると、彼はドウのケーキを並べたクッキング皿を指して、私に、<それ、持ってきて。トイレにね>と言う。<違った、オーヴンに入れるんだって・・・>と言い直す。彼はひどく混乱した面持ちである。自分が何を考えているやら不得要領である。もはや私にオシッコとは言わないで、まるでそのことは忘れてしまったかのようにして、その場から離れた。

[この混乱は面白い。彼の‘トイレ’と‘オーヴン’とがなぜに混同されねばならないのか。おそらく「誕生」を巡り、「母胎」の内側 inside の探究をしている。だが、そこはまるで迷路というか、とても彼にはとことん了解不能といった印象なのだ。背景に両親の性交から排斥されているといった疎外感も明瞭だ。さらには自分のペニスが‘足りない’といったような、矮小感もありそう・・・。又、「父親・ペニス」への羨望と嫉妬は見逃し難い。そこに彼の攻撃欲・破壊欲が投射され、俄然事態は混沌と化す。]

ジェームズは机に坐り、ドウの大きな塊に指を突っ込んでいた。それからぼそぼそ何やら呟いた。<これお家だよ、玄関の扉が小さいの・・・うさぎさんが居るんだ・・・>とやら。ところがどうやら状況は一変した。そこは‘車道 traffic road’ということになってる。そのドウの塊の上から小さなおもちゃのミニ・カーを押し付ける。それをメチャクチャに運転させる。それでそこにたくさんの車輪の跡が引っ搔かれた傷のように残った。それから彼はそのドウをクッキング・ナイフで小さく切り刻んだ。<ケーキだよ・・・>と言う。それからそれらを全部集めて、一つの大きな塊にした。それでとても満足げな顔つきで、終えた。

[ドウの大きな塊＝「母胎」、そしてそこに「inner-child(内なる子ども)＝うさぎさん」を発見したというわけだ。俄然羨望と嫉妬で攻撃欲が燃え上がる。小さなミニ・カーは彼自身のペニスである。それで何としてもその‘inner-child’を扼殺せんと躍起になっているわけだ。この「自慰空想」は、いかに彼が「母胎」の内なる子どもに脅かされているかが窺われる。彼のペニスは加虐的な‘報復の道具」と化す。ここにダンの場合にも似て、hypocrite(偽善者)の芽が紛れもなく存在する。ダンにとってもジェームズにとっても‘outer-child(外なる子ども)’としての己れはまだ承服しがたいものでありそうだ。]

・1975/10/10・・ジェームズは、テーブルの上の粘土で遊んでいた。その粘土の表面になにやら人間の顔らしきものを描いた。それからくすくす笑いをして、なにやらひどく興奮し始める。そしてその粘土を指でぐじゃぐじゃにしたかと思うと、おしまいにはそれを引き千切ってしまう。

[事実ジェームズには、生後2, 3ヶ月の赤ちゃんの弟がいる。それがどれほど彼には脅威であるかが察せられる。この遊びは、彼のその思い余っての‘子殺し infanticide’の暴挙であろう。]

・1975/10/17・・ダンが三輪車に乗っている。部屋の隅に積み重ねてあった椅子の脇を通り過ぎた。それら椅子たちの下(bottom)は暗くてトンネルのように開いていた。それを指しながら、<ハロー！赤ちゃんたち・・>と言う。そして傍らにいたジェームズに向かって何やら秘密っぽいサインを送る。……そのすぐあと、今度はステージの階段の辺りにいた。その階段の一番上を指差し、<赤ちゃんがいる！>と大声をあげて、くすくす笑う。それから、<赤ん坊を食べちゃう eating up a baby・・>と言う。ジェームズがこれを耳にして、すぐさま反応した。まったく愉快そうに、大きな口を開け、赤ん坊を呑み込んでしまうふりをした。これを眺めていたダンが極度に面白がり、興奮した。そして<ライオンみたい・・>と呟く。そして一緒にジェームズの「赤ちゃんを食べちゃう」空想の行為化 acting-out を続行した。

ミルクサークルの時間、ダンとジェームズとは隣り合わせの席に着いた。それから彼らはお互いに叩き合いをし始めた。おそらく最初は面白半分にやっていたのだろうが、だんだん陰悪となる。ダンはジェームズの手を噛みつかんばかりだった。それからジェームズの髪を口で噛んだ。そして引っ張ろうとした。ところがその髪の毛の味にむかつき、それを口から吐き出す。ジェームズはしたりやったりと愉快そうにくすくす笑う。それでさらにダンは怒った。それでジェームズの肩を強くど突いて、彼を泣かせてしまう。

[どちらにしてもまるで‘同性愛的’ではないか。彼ら2人の痴話喧嘩とでもいえそうな・・。最初の軽いキスのような触れ合いが徐々に互いに身体的な暴力となる。これでは残念ながら‘bad-intercourse (悪い性交)’である！おそらくはお互い同士、‘inner-child’への羨望 envy を投影し合っているんだろう。矛先を向ける相手が違うのに・・。]

ジェームズは三輪車に乗っていたが、その三輪車をビニール製のおもちゃのコンテナに乗り入れようとしていた。[実際そのコンテナは大きくて、子ども一人ぐらいは入れそうだった。]それから、しまいにはその三輪車をコンテナから出した。ダンが、ジェームズの遊びの一部始終を眺めていて、好奇心をそそられる。そして少しあとになって、彼は自分のレーシング・カーをコンテナに入れようと奮闘する。実際にはそのレーシング・カーはちょっと大きめのサイズで、しかもダンには引っ張るにも持ち上げるにもちょっと重すぎたのであったが、彼はやる気満々であった。[さてさて、「母親の内なる子ども」になれるかな？]

・1975/10/24・・ダンとジェームズとは一緒に机に向かい、ドウで何かを作ろうとしていた。出来上がったものは、「駐車場 car-park」ということになった。小さなおもちゃのミニ・カーをそこへ入れたり出したり

をした。それから彼らは悪戯を思いつき、意図的に互いの‘陣地’つまり‘駐車場’に侵入し始めた。一方の車がもう一方のドウ(駐車場)へと侵入すると、そのもう一方が抗議の唸り声をあげて、片方のドウ(駐車場)へと同じことをして報復し合う。クスクス笑いをするかと思えば、唾を吐いたり、或いはくそくそ poo··>と互いに罵り合いながら··。

ダンは、緑色のおもちゃのミニ・カーにひどく愛着している。口に咥えるやら手に持つやら、四六時中、何をしていようが、それを肌身離さず持っている。勿論、ミルクサークルの時間ですら手離さないのだ。

部屋の隅に椅子がたくさん積み重ねて置いてあったのが列をなして、その下(bottom)にトンネルのような空洞が出来ていた。ダンとジェームズは2人そこへ腰をかかめて潜り込み、端から端へとからだを移動した。どちらも互いに競うような具合で、興奮してはしゃいでいた。こうした空間 cozy-space が子どもらは大好きだ。やはり瞬時でも‘inner-child’の気分になれるからだろうが··。

玄関口に、扉が壁際に留められていた。その間にちょっとしたスペースをジェームズが見つけた。彼はそこへ三輪車に乗って入り込む。ダンがその彼の後ろに従う。2人分のスペースにはそこは狭すぎたので、彼らは押し合いへし合いをした。ダンがかなり執拗であった。実際のところ、玄関口のもう片方の壁に同じようなスペースがあったわけで、そこで私が介入し、あちらとこちらとそれぞれ三輪車を駐車できる「車庫」が持てるわよと示唆した。ところが奇妙なことに、紛糾した事態を解決することにはまるで関心がないかのように、もうどうでもいいやといったふうに彼ら2人はあっさりその場から去ったのである。

ミルクサークルの時間、ダンとシルポーとが互いに唾を吐きかけている。そうしないようにと私に注意されると、ダンが私に向かって、くそくそ poo だ··>と罵る。ダンとシルポーとの間に唾の吐きっこが続く。[シルポーはダンよりも半年以上年齢が上の男の子だ。]そのシルポーがダンの緑色のミニ・カーを奪う。ダンはしくしく泣き始める。私がシルポーの狼藉を阻む。それですぐさま‘車’の代わりと思ったのか、シルポーは私のネックレスを引っさらおうとする。この不穏なるものの種は何だろう？

[もしかしてシルポーは、ダンの‘inner-child’への未練にしがみついているのが気に入らないのだろうか。象徴的にミニ・カーは母親の乳房そして哺乳瓶、そのいずれでもあろうが、口唇愛的なものの断念 relinquishment をダンに迫っているのかも知れない。シルポーはダンよりも6ヶ月ほど年上だが、より成熟した印象がある。確かに、おもちゃのミニ・カーよりも私のネックレスを欲しがる方が‘outer-child(外なる子ども)’によりふさわしいかも知れない！]

シルポーが、ダンが口に咥えていた緑色のおもちゃのミニ・カーをとうとう奪うことに成功した。そして床にポイとうっちゃってしまう。ダンは気を動転させて、慌ててそれに駆け寄り拾う。それを再び手にした後も、彼は悲壮な顔つきで沈み込む。突如として、その‘乳房’ともいえる車を自分の口から奪われたことのショックから立ち直れない様子だった。おかしなほどにしよげてる。おそらく‘去勢’であったのだろう！

シルポーがまたまたダンを苛める。なにやら嫉妬めいて、執拗な敵愾心である。私がダンをウエンディ・ハウスへと連れてゆく。そこで一緒に食事をすることにする。彼がテーブルを用意し、料理もした。私に「ほらね、食べて・・・」とサーヴする仕草をする。それから外へ散歩に出かける。ダンは乳母車をゲットした。そこには赤ん坊やら買い物袋が入っていた。廊下で彼の母親と出会う。

〔これは妙な展開だ。なぜここで「母親同一化」なんだろう。母親・乳房を断念するには、自分がそれ・そのものになるしかないということなのだろうか。俄然彼の中の‘女の子の部分 girl part of himself’が頭を擡げたことになる。事実として、どうやらこの時期にダンの母親は妊娠したらしい。〕

ダンが‘トラクター’を運転していた。そして面白がってわざと他の車にぶつけて遊んでいた。彼が‘スポーツカー’と衝突したあと、それに他の子が乗っていたにも関わらず、さっさとその車輪を一つ取り外しにかかった！ やったりやられたり・・・ やられてメソメソ泣いてたのに、今度はやり返してる。相手が違うけど・・・

〔「去勢不安」を work-through してるのか。そうして男の子は鍛えられるというのは確かだが・・・。〕

・1975/12/05・・・ダンとジェームズは2人だけで愉しげに遊んでいる。どうやら他の子らは2人の関係から排除されている。互いに献身的とも言えた。彼らはウエンディ・ハウスの中に居た。ジェームズがお茶の用意に忙しくしている。ダンはテーブルに就いて、お茶をいただけるのを待っている。ジェームズに、「<お茶をいただいてもいいでしょうか？>と丁寧に尋ねる。<お皿の上にあるから、どうぞ・・・>とジェームズが答える。しばらくして、彼らは一緒に‘買い物’にゆくことに合意した。そこでウエンディ・ハウスを歩み去った。・・・このしばらく後、彼らは一緒にお絵描きコーナーで絵の具塗りをしていた。

・1976/01/16・・・ダンは彼所有の緑色のおもちゃのミニ・カーを常時携帯している。大概のところ口に咥えている。それがいつしかジェームズの習慣にもなっている。それが他の子らの羨ましさ envy・妬みをどれほど引き起こすかは驚くべきものがあった。彼らは敵意のある攻撃を折々に受けたのである。しかしながら、それも所有を巡っての奪い合いというよりも、むしろ他の子らにしてみれば、赤ちゃんっぽいから目障りだといった違和感やら反撥からだったのかも知れない。「口唇愛」への固着は断念されねばならないという意味合いで・・・。そして勿論彼らの方に利がある。

だがサッシャに関するかぎり、ちょっと違うだろう。彼はダンとジェームズの仲良し2人組みがそれぞれ手に持っていたおもちゃのミニ・カーを奪い取ろうとしたことで、彼らとの間に悶着を起こした。私がサッシャを押しとどめる。彼は、「<ねえ、ぼくにも何か見つけてよ・・・>と躍起になって私に頼み込む。ダンとジェームズがいつもミニ・カーを手に行っているのがサッシャには文字通り羨ましくて妬ましくてならない。赤ちゃんの弟がいる彼にしてみれば、事情はジェームズと似たりよったり・・・。本来は「同病相憐れむ」みたいなものがあったてもよさそうなのだが。・・・ミルクサークルの時間、サッシャがミルクを貰いに席を立ったとき、お隣のジェームズが自分の両足をサッシャの椅子の上にデンと載せる。意図的な嫌がらせか、顔つきは悪戯っぽく笑っている。どっちもどっちだが、互いに何やら鬱憤晴らしをしてるようだ。

・1976/01/23・・・ダンとジェームズとは一緒に大きな積み木を使って、‘トラック’を作った。そのフロントの席が運転手のものであり、そこに納まって二人一緒に随分と愉しげである。

・1976/03/21・・・庭先で、私が子どもらの遊びを見守っていたとき、ジェームズがビニールのフラフープを手を持って近づいて来た。私をそれで捕らえんとするつもりらしい。顔には悪戯っぽい、大きな笑いが浮かんでいた。

・1976/06/18・・・ダンと幾人かの他の子らが大きな積み木で「乗り合いバス」を作っていた。運転席があり、‘乗客’の坐る椅子も幾つかある。彼らは全員そこに乗り込んだ。ダンが運転席に腰を据え、ハンドルを握る(それは実際のものである)。少して、シルボアがやって来た。そして無言で、ハンドルを引っさらって行こうとした。ダンがどうかそれにしがみつき、揉み合っていたが、ハンドルを奪われずに済んだ。そしてそのしばらく後、ダンはまたもやニールとの間で運転手に誰がなるのかということで悶着が起きた。ニールは自分の番だとしつこく主張した。ダンはひどく腹を立てた。そして彼ら2人は取っ組み合いをした。そこにジャッキーが割って入った。ダンに、ハンドルにここ何週間もひどく固執して独り占めしていたのだから、そろそろニールに譲ってはどうかと説得した。ダンはどうかそれに従った。だが、悔しそうに泣きじゃくっている。「車のハンドル」は「母親・おっぱい」を制御・統轄するところの「父親ペニス」の象徴だ。それを奪われるのは、ダンにとって「去勢 castration」となるはず。事実、ダンはここずっと‘車のハンドル’をどこに行くにも一緒に引っさげていた。ミルクサークルの時間ですら、誰にも奪われないようにと、彼はそれを足元やら、椅子の下やら、或いは椅子の裏などに隠しておくのであった。それは彼の小さな緑色のおもちゃのミニ・カーに追加された彼の執着物であった。

・1976/09/22・・・ダンは大きな積み木で「トラック」を作っていた。私がそこを通りがかると、彼がくぼくね、トラックの運転手なの>と私に大きな笑顔で言う。そこで私がくあらまあ、君のトラックにはいっぱい荷物が積まれてあるんだねえ・・・>と答えると、彼はいかにもお世辞を言われたみたいに喜色満面となる。幾人かの子どもがダンの「トラック」に乗り込んだ。それぞれ座席を確保した。それからその後で、またまたニールとの間で車のハンドルを巡って衝突があった。[「トラック」もペニスの象徴。その卓越性を褒められることは‘男子の本懐’。褒められて嬉しくないわけではない。小児万能感の彩りがなくもないが・・・] ミルクサークルの時間、ダンが尚もいつもの緑色のおもちゃのミニ・カーを手握っていた。

ダンとジェームズは一緒に遊んでいる。木製のスケールに付いている穴に小さなつまみを差し込んで嵌めてゆく。そのつまみは彼らの思いでは‘車輪’ということになる。スケールを使って、‘列車’に見立てていたのだろう。[まるで‘ペニス’だ。それもなかなか機能性の高い、すてきに立派なペニスである！]

・1976/10/08・・・ジェームズが砂箱の中に四角いスペースを作っている。それは‘ガレージ’だと彼が言う。幾台かのおもちゃのミニ・カーを集めてきて、それらを‘ガレージ’に入れる。そして砂でそれらを覆って埋めてしまう。それから砂を両手で掬いあげて、車を砂から取り出す。それから彼は自分の片手を砂

の中に埋めた。ダンがそれに加わる。同じことをする。彼らは一緒に愉快げにその遊びを続行する。手を埋めて隠したり、また砂の中からまた現わしたり…。まるで「イナイナイバー」の感じである。〔ガレージが「母胎」を象徴し、ミニ・カー、それに手も彼らのペニスを象徴するとしたら、どこかこの‘性交場面’はヤバいだろ。まるで敵陣に潜伏したような、危うさがある。当然秘密っぽいわけだ！〕

ダンがまたまたニールと「運転のハンドル」の所有を巡って取っ組み合いをしている。ダンはすぐに涙ぐんで大泣きしてしまう。ニールがひどく執拗であったせいも、今度という今度は勝ち目はないとダンは諦めたのだろう。〔ハンドルが「父親ペニス」即ち‘男性性’の象徴だとしたら、ダンはニールにかなわない。〕

・1976/10/12…ダン、ジェームズ、それにニールが自分たちの‘お家’を大きな積み木で作っている。彼らは共同でお互いに計画をよく練ったようだ。さほど討論を重ねたわけでもなさそうだが…。彼らの‘お家’は、2つに区分けされていた。居間と寝室である。〈ぼくら、3人のおうちだよ〉と言っている。誇らしげである。それから女の子のエスタがおそろおそろ中に入ろうとすると、ニールが〈ダメ！〉と強い口調で拒む。〔いつもの2人にニールが加わり、3人になった。もうそれ以上はダメということか。当然、女の子は排除される。〕…そのしばらく後、ダンとジェームズは積み木をあちこちから拾い集め、スライド・ハウスの中へと運び込む。自分たちの‘お家’なんだと言っている。そしてその上の階はダンの、そして下の階はジェームズの住まいと決めた。彼らはそこに横になり、就寝時間だということにする。なんだかおかしそうな笑みを浮かべながら…。あれっ、ニールがいない。またまた2人に排除されたのかな？

・1976/11/05…大きな木製の箱があった。四角い穴が一つ、それにと丸い穴が一つ、それぞれ別々の側面にあった。ダン、ジェームズ、それにニールが中に入ってる。それから積み木でその穴を塞ぎ始めた。それは窓ということで、カーテンを引いたつもりというわけだから、中は暗い。そして折々に彼らは頭をそこからピョンと出して、〈ハロー、おはよう！〉と言う。それからまた中へと引き籠もる。彼らの会話が漏れ聞えた。ジェームズが〈ぼくがパパだよ〉と言う。ダンが〈彼がママだね〉と言ってる。ニールは〈ぼくだって、パパだもの〉と返答している。この少し後、ジョーがやって来る。なにやら悪戯っぽい笑みを浮かべている。ジェイクを呼んだ。そしてその‘お家’を指差して、〈ほらね、ジェイク。あいつらはあそこに囚われているんだよ〉と言う。彼らはそれに接近し、穴から中を覗き込もうとする。途端に中から抗議の声が上がった。ジェームズが外へと飛び出し、ジョーとジェイクを追い払う。そして中へ戻ってくる。彼ら3人はそこが居心地いいのか、一緒にしばらく箱の中にそのままいた。〔‘inner-child(内の子ども)’がいいのか、‘outer-child(外の子ども)’がいいのか、皆それぞれに微妙なところなんだろう。〕

・1977/01/13…ダンとニールとが大きな積み木で何かを作っている。試行錯誤で何度も失敗し、あれをどうする、これをどうすると2人で話し合っている。どうやらキャンピング・カーらしい。それに、木製のコンテナを運んできて、付け加えた。「救急車」なんだということに落ち着く。その中には後方にベッドがあるらしい。そのフロントの部分に、2人がちょうど入るだけのスペースがあり、そこは運転席ということになる。どうやら2人とも‘運転手’ということだ。事実2人の前にある車のハンドルを共有している。どちらも

満足げである。しばらくしてから、幼い子どもらがやってきた、そしてダンとニールのしていることに興味を持った。それから彼らの一人であるガリーという男の子がその木製のコンテナに入ろうとする。そこで私が<これって、‘救急車’なんですよ。病気の人とか事故に遭って怪我をした人たちを病院に運ぶのよね>と言うと、ニールがすぐさま、<この子らは頭痛持ち headache なんだよ>と言う。ガリーが<そうだよ、何千もの頭痛持ちだよ>と言う。他の子らがそれに加わって、<何千もの耳が痛い earache、何千ものお腹が痛い tummyache・・・>などと唱和する。〔幼い子らに対して、ちよびり‘お兄ちゃん’が出来ようになってきたかな？ダンは、母親の出産がちょっと気掛かりなのかも知れない。疎外感から免れるために、‘救急車’の運転手を買って出たというわけか。この‘演出’が心憎い！〕

・1977/03/08・・・〔復活祭の休暇を終えて、プレイ・グループの遊戯観察に戻ると、しばらく見ぬ間に、プレイリーダーのジャッキーがそろそろ出産を間近に控え、お腹の膨らみが随分と目立ってきていた。〕

ダンとジェームズ、それにニールが木製のコンテナの周囲に大きな積木を積み上げている。‘お家’を作っている模様。その一角に丸い穴を残す。それが玄関口というわけで、扉は開いている。彼らのひそひそ声が漏れ聞こえた。それは‘罨’であって、ジョシュアというグループの中で一番幼い男の子をその罨におびき寄せるといふ悪企みに熱中しているのであった。彼らは代わる代わるにジョシュアに接近し、彼を誘おうとするが、うまくゆかない。ジョシュアは実際絵の具を使ってペインティングに忙しく、それにおそらくどういふことが自分に期待されているのか状況を理解できなかったであろう。まったく反応せず。それで、ダンたちは断念せざるを得ない。諦めて、自然他の遊びへと移った。後で、私がジェームズにジョシュアに何するつもりだったのかと尋ねた。<彼を罨に嵌めて、捕らえたら、拷問するつもりだったの>とニタニタ笑いしながら、いとも簡単に自白した。〔‘inner-child(内なる子ども’は母胎にいる！それはもはや隠しようのない現実だ。そして彼らの敵愾心は燃え盛り、グループの中の一番幼い、つまり‘赤ちゃん’の子どもへと転移され、鬱憤晴らしせんとしていたことになる。その憎悪は熾烈だ。〕

・1977/03/17・・・ウエンディ・ハウスの中で、ダンとニールとがスーツケースになにやらあれこれ物を詰め込んでいる。カップやら皿やら、薬缶すらも、抱えられるだけいっぱい詰め込んだ。彼らは、<これから休暇でお出掛けなんだよ>と言う。ニールは小さな女の子の人形をも抱え持つ。お世話してあげるんだとか。それで彼らは出発した。さてそれから、彼らはスライド・ハウスの天辺に腰を据えた。それは今や‘お船のお家’ということだ。世界中を航海してゆくんだとか。そこで出航した。彼らは、さようならと叫んで、私に手を振った。いかにも愉快そうである。〔彼らは近々プレイグループを去る予定ではあったが・・・そこには愛着の陰りも未練の片鱗もない。実に屈託のない「喪の儀式」である。〕

・1977/03/31・・・ジェームズとダンは、ウエンディ・ハウスへ侵入する。どうやら台所の‘クッカー(レンジ)’を盗む魂胆らしい。彼らは‘泥棒’の一味というわけだ。彼らは‘クッカー’をウエンディ・ハウスの外へと引きずり出す。ここにニールが現れる。たまたま彼はナイト(騎士)の仮面を被っていた。すっかり騎士のつもりだ。そこで義憤に駆られたというわけか、‘クッカー’を取り戻すべく、彼らと対決することに決めた。



この取っ組み合いの最中に、ジェームズが私に「クッカーを『泥棒の家』まで運ばねばならないんだ」と言う。スライド・ハウスを指差しながら・・・つまりそこが彼ら泥棒の巣窟というわけだ。彼のプランはいかにも非現実的である。というのは、クッカーはどうしたって、そのサイズやら重量からしてそこまで運ぶのは無理だから。ニールが嘲った。しかしながら、ダンとジェームズは断固決行するつもりでいる。ともかくもクッカーをスライド・ハウスの辺りまで引きずってゆき、その脇の滑り台の下にそれを置くことはできた。それで彼らは大満足の体であった。だが、そこでマーゴが「くお時間よ、お片づけして」と皆に呼びかける。2人は唯ぼうっとしてる。まだ空想に浸り、夢覚めやらぬ。〔このスッタモンダは彼ら流の「別れの儀式」だったのかも知れぬ。背景には苛烈な剥奪感 (deprivation) が潜在している。だから報復に余念が無い。『泥棒』になり、愛の対象を空っぽにするという「躁的防衛」で恨みの涙を凌いだということだろう。〕

・1977/04/01・・・ダンとジェームズが室内で床の上に腹這いになってバタバタやっている。どうやらプールで水掻きしているつもり。たまたま他の子どもらが外に出てしまい、辺りには誰もいなかったので、室内の広いスペースを完全に彼らは占有できた。そこで彼らの造った積み木の『自動車』の周りを大きな円を描きながら、床をクロールしながら『泳いで』行く。それから彼らは自分たちが『サメ』だと空想した。尚も泳ぎながら、いっそう腕を大きく振り回し、力強い泳ぎをして進む。そしてすぐに私の身近に迫ってきた。彼らはあんぐりと大きく口を開け、一呑みにせんと私の足を狙い、襲い掛かった。そこには口唇愛的愛着も垣間見られなくもなかったが・・・〔プレイグループでの最終日である。ダンとジェームズの2人組みは最後の最後まで、男同士のつるんだ関係性の中でひたすら攻撃欲を発散した。かくして彼らはめでたくもタフな『外なる子ども outer-child』にはなれた。だが、彼らの『内的現実』を覗いてみると、むしろ愛の対象 love object を専ら無価値化 devaluation することが著しく再燃化している。とりわけ『悪しき父親ペニス』の摂り入れ同一化が顕著であり、その結果、『母胎』は荒廃 devastation と化す。かくして彼らの愛着したいかなる対象も、無情にもあっさり『用済み』にされるというわけだ！〕

\*\*\*\*\*

#### 【補足】

ダンとジェームズは近隣に住んでいる。従ってプレイグループ以外でも一緒に遊んでいるらしい。休暇も家族ぐるみで一緒に同じところで過ごす聞いた。ダンの母親は、1976年の夏頃、男子を出産した。すなわちダンの弟の誕生である。こうした家庭状況が、彼らの遊びの中に微妙に反映されている。

さて、帰国後の或る日、私は知人宅に泊まっていた。そこに4歳の男の子がいた。彼がトイレの中で独りゴチャゴチャとお喋りしている。よく耳を澄ますと、<いいなあ、いいなあ、ぼくのおちんちん、いいなあ・・・>と繰り返して歌う、無邪気な声が聞えた。心がほっこりとして私は嬉しかった。今やその彼も伴侶に恵まれ、二児の父親である！ふと思う。ダンとジェームズはプレイグループで女の子らとの交遊がごく希薄だった。しかも、彼らは自分の『性器』に大いに拘ったわけで・・・それがどんなふうに『良いもの』となるのか、まだまだこれからの長い人生の紆余曲折があろう。傷つけ・傷つけられながらも・・・いつしかあつぱれ英国男児としての気概と優しさが彼らの中に育まれんことを祈る。 (2013/11/13 記)

\*\*\*\*\*